

Eugene O'Neill の作品における “Mother”

木 村 俊 夫

(一) Eugene O'Neill は単にその作品の形式をきつてのみならず、又思想にきつても多くのものの “melting pot” である。彼の思想を構成したものに就ては、Nietzsche, Freud, Marx, Wedekind, Strindberg, catholicism, Irish mysticism, 東洋思想、古代神話等、その他様々のものを算えあげることが出来る。そして O'Neill 自身はこれ等のどの一つにも解消しきれない、O'Neill 風を發展させた。これが明確な体系を持った思想であろうと、或は単に気分的なあいまいさを持ったものであらうと、ともかく彼の言説及び作品を通してする他にこれがかがう道はない。さて彼の作品の登場人物相互の連関をたどつて行く事によつて、この彼の作品に特徴的な思想の型をうき上らせる事が可能のようと思える。

筆者は先に O'Neill の一般的特徴を、海においてとらえた事があつた。彼の作中人物は、海に暮し、或は海を想い、月の光をあび、月をみあげ、そして母への郷愁にとりつかれる。或は又、海にその運命を翻弄され、母への想念からの脱出にもがく。海への nostalgia や海の圧倒的な力が、比較的そのままの形で示された初期海洋劇は、發展し、やがて中期以後の作品となるに従つて、海は人物の思想の中に觀念定着を行ははじめ、やはり重要な意味を以つて作品を支える事になる。以下には O'Neill がどの作品で、如何に、“mother” を扱つてゐるかをかがうかがつてみたいのであるが、この “mother” も又 O'Neill の觀念する「海」の一つの形象化ともみられるのである。

(2) はじめに彼の最近作 “A Moon for the Misbegotten” (一九四三年作) にあける heroine の性格をうかがい、次に以前の諸作品の中にこの性格の連続を求めて行く事とする。

“Josie は二八才。女にしてはあんまり大きいのでグロテスクなほど。身長五呎二吋、体重一八〇ポンド。そのなで肩は幅が広い。胸部は部厚くて、大きながつしりした胸をしている。腰は大きい、尻やもとの対照ですんなりしている。腕は長くすべすべして、筋肉隆々というでもないのにとつても強力。足も又同じ事。すばぬけて強い男ならばとも角、力で彼女にかなう者はない。なみの男二人分の働らきが出来る。だが少しも男男した所がない。彼女は全く女らしい。

顔はまぎれもなくアイルランド型。長い上唇に、小さな鼻。こい黒い眉毛。馬のたてがみのように粗い髪の毛。そばかすのういた日やけしたうつくしいひよ。高い頬骨。ごついあご。美しい顔というのではないが、その大きい暗青色の目が顔を美しくみせる。笑うと並びのよい白い歯がみえて愛らしい。」

Heroine は、この女である。彼女が一寸ついただけでも相手はのけぞるほどで、弟 Mike も父親も、近隣の誰もその強力にはがなわなない。いやがらせにしばしば境の垣をつぶされて、そのの文句を云いに来た隣家の Harder も父娘に散々嘲弄されて、ほうほうのていで退出する。働らきでももある代りに、口の汚いこともおびただし。父を助けて、家の癡馬や病牛にいんちきをやつて人に売りつけてみたり、それに自ら近隣に醜聞をまきちらしている、と称し、自ら「幾人もの男と遊んでも、結婚しない。」「どんなにいい男だつて結婚なんかして男につながれておくのはいや。」と放言する。併し彼女は地主の Jim にはどうやら仲々ひかれてゐる。姉が Jim に秋波をおくつてゐるのをみた、という弟には、それは姉が父親と結托して Jim からまきあけようとのたくらみと映る。事実父娘は農場を Jim から安く譲りうけて自分達のものにしようと計り、一計を案じ、Josie は Jim を自分の寢室に誘ひこみ、父親がその現場に現れて脅迫しようとする。Jim は「父親が生きていて仕事につけてくれた間舞台に出ただけで、今まで何の仕事もしない

で、酒ばかりくらつている」男である。この男に、しかし、Josie は欲得すくだけではない気持を持つている。この Jim は酒をあふつては時に、何故か、急に様子が変わり、悲しそうにし、自分の身内にある亡霊を悼んでいるかのようになり、ほんやり虚空をみつめているような男であるが、Josie にはそれが男に亡母の憶い出、母を死なせた嘆きがよみがえつてくるからである、と判つている。この大女に Jim も又ひかれてはいる様子。父親は娘に結婚をすすめる。だが「馬鹿でかい牝牛」であり、「牛のようにごつい娘」である Josie は「私は不細工なごつい女だし、私をほしがるような男は馬鹿野郎さ。それに遺産をもらつたら Jim はかわいひ白粉ぬつた Broadway の娘たちをすきなだけ手に入れられる。舞台の踊り子だつて」と卑下する。Jim が近頃よく家に来るのは、「酒のんで気分が悪くなる時だけで、それもわしの顔みに来るちゆうより、お父さんと冗談たきたきに来るのさ」と思える。父から Josie は男たちに対して物云いが乱暴だが、Jim にだけは言葉をつつしめと云われると、馬鹿にしたように「うん、わしが virgin ぶらねばならんのかい。うまいことたませることだろうて、酒場で村の衆からわしの事をすつかり聞いて知つてるのにな」訪れた Jim に my Virgin Queen of Ireland と呼びかけられて「わしを virgin なんて馬鹿な呼び方せんとおいとくれ、そんなうそつばちひろめられたらわしの名折れだもん」と云つて笑ひ、百性しているより暮しが楽だから町の女になろうかと思つたとも云う。こんな口をきく Josie に Jim は顔をしかめ、彼女をたしなめながらも、Jim は彼なりに Josie が好きなのである。Josie は「今晚おいで、二人で月の光をあびてさ、あんたの思うてる事をわしに云うとくれ」と誘ひをかける。

併し Jim は Josie はただあばずれぢつてはいるだけで、ほんとには彼女は innocent virgin だと知つている。そして彼女を愛するが故に彼女を汚す事をおそれ、もう二度と彼女と会わずに土地をたち去ろうかと思つていたらしい。併し約束の刻限をすつとあかれてながら、皎々たる月光の中に Jim はやつて来た。酒をのませ Josie は Jim をたらしこ

みにかかる。男は一度は「娼婦」Josie にひかれようとする。併し実は彼が求めていたのはそんな娼婦ぶつた Josie ではなくつた。

男は目をとじ、月の光をあびて青い仮面のような、安らぎを得たデス・マスクのような表情で Josie に抱かれて、こんなうちあけをする。父も死に、兄も家からはなれてしまつた後では、Jim と母は二人きりとなつた。Jim は酒が好きであつた。併し母はそれを好まなかつた。母を愛する Jim は酒を絶つた。併しフト病んだ母は、にわかにも容態が悪化して行き、もう絶望となつた。Jim は氣狂ひのようになつた、母と死に別れるにたえなかつた。彼は又酒をくらしい酔つた。そしてもう母が二度と昏睡からさめず、自分の酔つている姿が母から見えない事を願つた。だが母は息子が酔つている事を知つていた。母はそれが見えないですむように目をとじた、そして死ぬ事を喜んだ。母の死後もやけ酒をあふる Jim は、母の死顔を見ても、まるで自分が死んだものであるかの如くに無感動となり、もはや何のなげきもわかなければ、涙も出て来なかつた。母の骸骨はこぶ汽車の中でも、孤独にたえられなくなつた彼は、車中をあちらこちらうろつきまわり、遂に娼婦を買つた、それはまるで復讐の如きものであつた。もう頼りとする者は誰もない。母親が自分をおいて死んだ事が許せない、とまで駄々をこねる彼は、悲嘆と悔恨のはてにあつたわけである。

このうちあけをきいた Josie は Jim で、Jim の母親になり代つて、死んだような Jim をひざにのせ Jim のやつれきつた顔を自分の胸に抱き、照りわたる月の光の下で、あけがたまで Jim をあやし眠らせるのである。Jim は実は Josie の中に母親を求めていたのである。「晩の内、死んだ子を抱いてた virgin があけがたになつてもまだ virgin なんて、こりや全くの奇蹟じやないか」と Josie は云う。Jim はもう死んだも同然の男だつたのである。それは呪われた魂が、告白し、許され、夜の安らぎを求めに、月明りの中をやつて来たのである。さて Jim は元々から農場を自分達にゆずる気であつた。Jim を愛する Josie は併し元の願とは違つて、母となつて Jim を抱きしめてやる事では

か、Jim に自分の愛をささげる事が出来なかつた。Josie はひびきに眠る Jim を起すにしのびなす。「Jim、お前をまたこの世へつれもどすなんていやだね。あんたは眠たまんま死んでしまえたら、それこそ願つたりかなつたりじやないかい。」夢からさめ、やがてまた立ち去る Jim を見送つてむせびなく Josie は幕切にこう云う。「早くあんたの思い通りになつて、眠っている内に死ねますように。永遠に許と平和の内に安らいますように。」

(e) 以上「主と」の heroine Josie の性格をうかがつて来て、この作全体の梗概はくわしくのべなかつたが、この劇は笑劇風にはじまり、それがやがて悲劇味をおびて来る。この味はすでにこの作を含む連作ものの第一姉妹篇である *The Iceman Cometh* におつてもはつきりうかがえたが、これはもとよりオニールの意識して行つた事である。(cf. *Time* Oct. 21, 1946) 過去におつて数々と試みた假面劇におつて特に顯著に、又その他の作品の多くにおいても、登場人物の性格の二重性を示したりした O'Neill であれば、何もこの作風の出現は唐突のものとも云えまじ。

今みた Josie の持つ娼婦をとりと virgin mother 風な性格はいつても、吾々はその先例をすでに *Anna Christie* (一九二二演) に見出す事が出来る。正真の娼婦であつた Anna も、海に来、霧につつまれ、Burke を知り、男にひかれて行くにつれて、今まで失つていた何物かを見出したような気がし、汚れた身体が洗われたような気がして、その「娼婦」はやがて消えて、一個の純な乙女に変つて行く。母からゆすりうけて以来、肌身はなさず持つていた十字架を Anna にわたす Catholic 教徒の Ireland 人 Burke にうけとられる Anna は実は、極めて通俗に捉えられた。Virgin Mary であつたにちがなす。

今日のアメリカ演劇をひらいた O'Neill は初期からかけて、舞台上に数々の新しい実験を試み、又作品の内容によく時代の風をとり入れて、劇壇を活気つけた。ごく初期の *The Web* (一九一三作) より以後、作中にしばしば娼婦が登場し、しかも仲々に重要な役となり、ある時は主役となつて現れて来るのは、かの genteel tradition への痛烈な攻

Eugene O'Neill の作品における "Mother"

撃を、彼も又劇壇の第一線に立って行つた事を示している。やがて形而上的關心を色づく作品にもありあけて行く O'Neill は、この barren の賤民、娼婦を通じて、自己の哲學を説き、ひいては文明、社会の批判を行わんとせんとするものゝうである。それは *The Great God Brown* に一番よくかがみられる。但し今の娼婦 Anna は未だその barrenness にあつてはとらえられず、身の汚れを海の霧に洗つた清純な乙女となつて、Burke に抱かれる。現実的に Anna をみた場合、彼女の更生は信じがたいものと見える。吾々が彼女の更生を信ずる事ができるのは、唯これを象徴的に眺めた場合に限る。(cf. A. H. Quinn: *A History of American Drama From the Civil War to the Present Day*, p. 176) 併しこの作品は現実的な味が勝つてゐる。そしてこの作品は甘く、この中で未だ彼の「哲學」をあらわすことが出来なす。併しこうした Anna を描く O'Neill であつた後、*The Great God Brown* にあつた Cybel を登場させ得たのであらう。この Cybel はしばしば Simon Ganfillon の *Maya* (一九二四演) に比せられ、又 Oscar Cargill: *Intellectual America* (一九四一) によれば Waldo Frank の *Rahab* 及び *City Block* (一九二二) に現れる Fanny Dick Luvé が Cybel の prototype であると考へられたり、Anna Christie なる作品が *Christopherson* より發展して完成せられたのは、すでに一九二〇年夏の事であつた。

(4) 次の *Desire Under the Elms* (一九二四年作) にあつる 'mother' も又注目すべきものがある。

「家の両側に二本の大きな楡の木がある。枝がたれさがつて屋根の上に掩いかぶさつてゐる。保護してゐるようにも見えるが、又征服するようにも見える。その様子には不吉な母親らしさが——一途に押し潰そうと妬むようなところがある。この家に住む人の生活としたしく接触したため、そつとするほどの人間性を得たのだ。木は圧迫するように家を掩つてゐる。それはまるで疲れきつた女が、たるんだ乳房と両手と髪を屋根の上においでゐるようだ。雨の時にはその流す涙がホッリホッリとしたたり落ちて屋根の上へ腐る」

この陰惨な気分とはがらりと変つてゐるにしても、やはりこの楡の木の大なる妻は、巨大な *Dynamo* (一九二八年作)となり、又大女 *Josie* へと続く、大きな母性の象徴なのである。この二本の巨木が *Eben* の亡母の霊を象徴してゐる事はまぎれもない。父にいじめられて死んだやさしい母親への思慕、その母の仕返しをしようとの執念にとりつかれてゐる *Eben* がこの家に生いたつて行く。 *adolescence* にあつてゐる *Eben* の母への一途の思慕はこの作品では *Desire* 物欲、性欲と奇妙にからみ合つてゐる。會つて母の棺の納められて以来開けた事のない部屋の中で、*Abie* と結ばれる事によつて *Eben* は、重く苦しう家には掩いかぶさり、自分をだきすくめようとする母の両腕からはじめて解放されたかに見える。此所に彼は *maturity* を得るかに見える。すでに *Abie* には *Eben* に対する性愛に母性愛がまぎり合つて、*Abie* は *Eben* の母の亡霊を墓に追ひやり、自分が *Eben* の母になり変つたのである。併しこの女は父の妻であつた。 *Eben* が折角 *Abie* との間で得た幼児は、自分の母性を殺した *Abie* によつて扼殺され、*Eben* と *Abie* は官能にひつたてられて行く。この作品においては、會つて *Eben* にやさしかつた母親は、死後は逆に後に残つた息子に対し、圧倒的な力の「不吉な母親」となつて、彼の成熟を不幸なものとする。 *Jim Tyrone* を生きながらの死児と化し、これを母になり代つた *virgin Josie* に抱かしためたもの、つまり *Jim* の正常な人間の成長を阻んだものもやはりやさしかつた母であつた。

O'Neill においては、登場人物が、この母への郷愁を超え *maturity* をとけようとする時、つまり「正常な生活」を持つとうとする時には、この「母」が不吉な力を以つてそれを阻む。*O'Neill* の作品の登場人物は、「自己」を失ひ、若くは「自己」をかくし、假面の自己で生きなければ、*maturity* は果されなうものようである。その事は次の *The Great God Brown* (一九二五年作) にもうかがい得よう。

(5) *Billy Brown* の母親は「さんぐりした四五才の女、黒のししゆうや、ピカピカもので着飾つて」登場し、*Dion*

Eugene O'Neill の作品とそれの “Mother”

Eugene O'Neill の作品における “Mother”

Anthony の母親は「かほそい、色香のあせた女で、その態度は常にいらいらして氣狂いめらいている。併し愛らしやう顔で、昔は美しかった……安物で粗末な黒の服を着ている。」 Skinner (*Eugene O'Neill A Poet's Quest* 1935 p. 168) は後者に、*Desire Under the Elms* 中の Eben の母親の、又前者に *Marco Millions* (一九二五年作) 中の Marco の妻となる Donata の徳をみつゝるが、*A Moon for the Misbegotten* に於ける Jim Tyrone の母親も又 Dion の母親に酷似している。「成功」の化身でありながら「創る者でも創られた者でもない」Brown が恋を得る事が出来ないので対して、Dion は Margaret を得る。Margaret は作者自身の解説によれば、*Faust* 中の Marguerite にその原型を持ち、種族保存という目的への手段となるもの以外の一切を知らぬ貞淑な素材な本能を持った永遠の娘一般をあらわす事になつてゐる。この Margaret の愛する者は、併し、St. Anthony に型どつて象わされる素顔の彼ではなくて、Dionysius に近すけられた假面の男であつた。食人鬼とも憎む父が母に与えた唯一の玩具となつて、母と自分と二人きりで親子づつこをしてゐた Dion は、假面と共に成長し、Margaret を得、彼女に自分のひふとも甲冑ともなつて世間から保護してもらひ、学び、教はり、偽りを知り、裸を被いかくし、嘘をつくのを学び、足どりみださず、世間の行列に加わろうとする。併し彼は末だ母を切なく慕ひ、又彼は Dionysius—St. Anthony の相剋の苦悶を深く味わう。彼は Brown とは異り創造の力は持つてゐた。併しこの老人くさい子供は、眞実は命を愛する男であつたに拘らず、その生命を支配するには余りに弱く、遂に彼は娼婦 Cybel を母としたいながら死んで行く。Margaret より見れば素顔の彼はすでに生き乍ら死人のようであつた。Dion の假面をゆすりうけた Brown にも、その假面の持つ自己破壊の力がしのびこみ、彼も又 Dion と同じ苦悩をなめた未、彼にも「魂」が生れ、Brown も又 Dion と同じく大地の母 Cybel に帰依する。

二十才位の強くてしずかな肉感的な娘で、生き生きして健康そうな顔、胸の広い、尻の大きな体格、その動作は動物のように

の多くなつて、ぎこちなく、退屈そうで、その大きな眼は心の本能の動きを映して、夢みるようである。永劫に果しない時をも
忘れた聖牛のようにチェーンガンをかんでゐる」

この娼婦であり、異教的大地の母 Cybele を象徴する女は、O'Neillによれば「自然に逆らつた法則の支配する世界
では賤民として分離され、かく分離を行つた者によつて保護される」位置にある。事實は、彼女は大地の母でありなが
ら、かの Demeter と異り、全く不毛の娼婦である。現実にも命を生む者は Brown の母、Dion の母、そして Margaret
であり、Cybel は命を生む事には関与しない。彼女は唯 Dion—Brown の命の郷愁のはて、墓である。しかもこの
作品で Dion と Brown は結局合一せしめられたに反し、Margaret と Cybel はついに別な二つのものそのままであ
る。終幕に於て Brown をみとる Cybel の側で、Margaret は尙假面のみをうつくしんでゐる。Cybel は聖なる娼
婦である點に於て Anna Christie と等しく、不毛なる大地の母である點に於て異なる。彼女も又臨終の Brown の側
にあつて「とこしえに春はめぐり来り、生命を生む、とこしえに春も、命も、夏も秋も平和もめぐり来る。併しと
こしえに愛と受胎と生みの苦しみはめぐり来る。春はたえがたい命の杯を生む、光榮ある輝く命の冠を生む」と云ふ、
「存在する吾等の父」を確認する。この言葉だけをみれば Cybel も又この世の生を肯定するかに見えるが、結局 O'Neill
は、この作品の中で、Dion の口を通して、「子供を生んだつてそれが何になるんだ。死に生を与えたとしてそれが何に
なるんだ」と叫んでゐるように思われる。

(9) この mother symbol は *Lazarus Laughed* (一九二七年作) においては又少し異つたとり扱いをうける。
Christ によつてよみがえした Lazarus は、一幕におきては五〇才であつたが、やがて幕の進むにつれて、四〇(一幕
二場)三五(二幕一場)三〇(二幕二場)、二五(三幕一場)才へと若返つて行き、毒桃を食つて果てた妻の側にある
時には、まるで母の骸をみとる若く息子の如くである。これに反し妻の Miriam はどんどんと老いこんで行く。この

Eugene O'Neill の作品に於ける "Mother"

夫婦が又母子としても捉えられてゐる事は明白である。Miriam は Lazarus を、又 Lazarus の笑顔をわが子としてうけとり、はてはその若き Lazarus や笑ひもが、彼女にとつては余りに若いものと思われ、笑ひが死さながらの誕生とも云うべき末生の世界へとび去る折の、新しい陣痛を感じ、彼女は死んで行く。しかもこの母 Miriam は Lazarus との間の子がなかつた。次々に生れた子は女子ばかり、それも皆死に、最後に生れた男の子も死んで生れたとか。Lazarus が一度び死んで得悟する頃よりの彼女は、すでに、子を懐い出としてしか持つ事の出来ない不毛の女であつた。Miriam は半仮面をつけてゐる。

「彼女の顔の上部は仮面で掩われていて、この仮面が彼女の額、目、鼻をかくしているが、口は現われたままになつてゐる。この仮面は大理石のように、潔らかで蒼く、『女』の像の持つような、母性のうける強制、即ち愛が苦痛となり、喜びとなり、又新しい愛が再び別離と苦痛、老年の孤独となる避けがたい循環を甘受してゐるような表情をおびてゐる。仮面の両眼は殆んどとじられてゐる。そのまなざしは、外の世界を忘却して、内を向き、永遠に記憶の中で胸に抱く子を夢みている如くである。Miriam の口は敏感で、悲しげで、自己忘却のはげしい又分別のあるほほえみをおびてやさしく、唇は尙生き生きと若やいでゐる。そのひふは、仮面と対照的に、Lazarus のと同じように、陽にやけて土色をしてゐる。」

Skinner はこの仮面を「とこしえに春はめぐり来り……光榮ある輝やく命の冠を生む」と叫んだ Cybel の、又仮面の両眼に Margaret の「そこへ口 Fountain (一九二三年作) 中にまける Maria de Cordova や Beatriz のおもかけを見てゐる。Miriam の口に Maria や Beatriz の連鎖を求めゑる事は全く正しいと思ふ。併しその上にかぶせた仮面と、その目とを別々のものと、——それぞれ Cybel と Margaret に結びつけてゐる事は如何かと思ふ。今の筆者にはこれがやはり一つのものであるように思われる。苦痛と喜びとを含む循環する愛を認めるにしても、それは、外の世界を忘れた、内に向けられた——非現世的な、彼岸的な性格のもの——しかもその彼岸が未来ではなく、死児の記憶

とさう過去のものでしかならぬ。Miriam の仮面とその目とはやはり一つのものと Cybel とのみ結びつくのではなからうか。

この Miriam はその口もとの象徴する自分の命にあふれた本性を Lazarus によつて否定せられ、彼女は遂に Lazarus の目前で、われから毒桃を食つて果てる。そして若やうで行く Lazarus によつて要求せられる「母」としての表情を Miriam は仮面として顔につけてさるのみである。Lazarus の悟りは命にあふれた妻の素顔ではなした、その上につけた母の仮面を要求したのである。Lazarus の笑い、悟りの本質をうかがう事は当面の問題ではないが、その Lazarus の笑い、悟りが、Miriam にこうした仮面を要求したとさう事実が、Lazarus の本質を間接的には示してゐるであらう。

この Lazarus Laughed の中で Lazarus の「母」Miriam と対照的に描かれてゐるのは Tiberius Caesar の母 Livia である。彼女はしたたかな女であつた。Augustus と結婚する時には、その夫を愛するとさうより、Caesar の妻となる自分を愛してゐたのであつたが、後に Tiberius を生む時にも、それは子供を欲するとさうより、やがて Caesar となるべき者を欲してゐたのであつた。Tiberius は、自分が母の愛を得るためには自分が Caesar たらねばならぬ事を知つた。母は野望をとけるためには Tiberius の兄達をさへ殺してしまつた。やがて Tiberius は、この息子を自らの武器たらしめようとしてゐる母の権力をうばう事によつて、この母に報復したのである。「Lazarus わしは若さがほしいのだ、そしてわしが母の目色をうかがう事をおぼえるようになる以前に、わしが母に對して持つていた愛の心で、母の足下でも一度たわむれてみたいのだ。」と訴えるこの世俗の王者 Tiberius はほとんどむせび泣かんばかりである。自分の妻とした Agrippa との愛に支えられた二人の幸福を破壊してまで息子を Caesar たらしめようとした母への憎しみ——報復——そして幼時の純な愛への思慕を Tiberius は長々と語る。Miriam との対照は明らかであ

る。外の世界を忘れ、内に向けられた Miriam の仮面の目と丁度逆に、Livia は内なるものを忘れ、その目は、Caesar をしたたく外の世界をばかりみつめていたのである。Lazarus の笑みによつて、自分の死の恐怖を超克せんともがく Tibertus は、この憎さうな母の他にも一つあつた幼時の純な愛の対象としての母を限りなく思慕する。この Livia の連鎖を吾々は Billy Brown の母親に見出す事が出来よう。それは Margaret ではなく、Margaret と異り Livia は素顔の Brown を愛し、求める女である。

(一) *Lazarus Laughed* に於ける Miriam の半仮面は悟りを開く Lazarus によつて要求せられた存在であつた。この「母」は次の *Strange Interlude* (一九二七年作) の中では、自らが主人公となつて現実の生を試みる。

「神様が男の形をしてつくられた時に間違ひが起つたのだわ——勿論女は神様をそんな風に思ひたいでしょうけれど、併し男の方は紳士らしく、自分達のお母さまを想うて、神様を女にすべきだつたんだわ。併し神神中の神、御本尊はいつだつて男だつたんだわ。だから人生がこんなにゆがんで、死というものがこんなに不自然になつてしまつたんだわ。私達は人生は母なる神の陣痛の中でつくられたんだと思うべきだつたのだわ。そしたら私達は母神の子である私達が苦痛をうけついでわがが判るでしょう。私達は私達の命のリズムが、愛と生みの苦しみにひきさかされた母神の偉大な心臓から脈打つてるものだから、死とは唯母神との再会であり、母神の実質となり、母神の血液中の血となり、母神の平和の持つ平和へと戻る事を私達は感じるでしょう。」

この人生は事實は父なる神の電気の芝居の中の奇妙な幕合狂言にしかすぎない。そして父なる神の息子達というものは失敗なのである。併し Nina は自らが一人の母なる地霊としてこの世界に生き、これを支配しようとした。彼女は Gordon との結婚をとける事が出来なかつた。併し彼女は勇敢に現世におゝつてこの挫折のとりかえしを計画する。自分に強制された不毛性を雄々しく克服せんとしたのである。併し乍らすでに Gordon を失つてしまつてゐる彼女の以後の生活は、偽りによつてしか掩う事は出来ない。傷病兵達に「愛」を捧けてもみだされず、子を欲するが故に、愛情も

持てない Sam Evans と「うわへ」の結婚をし、妊娠しても、恐るべき遺伝が Sam の血の中にある事を知つてその命の芽生えを殺し、そして夫ならざる恋人 Darrell をわが子の父に撰ぶ。併しこの子は「科学者」Darrell がもえあがらうとする「愛」を殺して試みた、単なる「実験」の結果として生れたものにしかすぎない。生長するわが子 Gordon に集中する愛は、Gordon と Madeline の結婚によつて敗北する。彼女はついに父としてしか見ていなかった Marsden と結ばれるが、その時はすでに彼女の人生の暮れ方であり、二人の灰色の結婚によつては、何の愛の火も、新しい命の誕生も約束されていない。夫に Sam を、恋人に Darrell を、父に Marsden を、そして Gordon なる子を得た時、自己中心的な Nina は幸福の絶頂にあつたと云えるが、それは全く偽りのほかならぬ幸福であつた。終幕、飛行機でとび立つて行く Gordon の方に向つて Nina は「あたしの昔の Gordon のように、地面に落ちたりしてはいけなよ、幸福にお暮し、お前、お前は幸福にならなくちゃいけないの」と願うが、これを Darrell は皮肉にひきつゞて云う。「幸福を求めるその呼び声を、私は前にも聞いた事がある。Nina さん——私自身がそう呼ぶのを聞いた覚えがある——前に——もうすい分前の事にちがいない——私は私の細胞に帰ろう——海に漂つて、幸福を求める呼び声なんて知らない、敏感な単細胞の生命に。」この作品は Nina を中心に集う多くの男達に Onegin が荷寄せた多くの意味によつて更に興味が多いが、現実的に母たらんと試みた Nina に局限して云える事は、父—母—子の關係の無惨な破壊である、と云えよう。

(8) 次に *Dynamo* を見よう。口もとには反抗の様子が見えるが、その表情は貞淑なあきらめをおびている Reuben の母、甘い夢をみがちな Ada の母は、その型にいく分の違いを見せつつも、共に重要な意味を与えられているとは思えない。併し「巨大で黒く、大きな女の偶像のような所があつて、その胴にとりつけた励磁器は、鈍重で円々した身体の上に置いた首に、うつろな横長の両眼がつゞしてゐる、如くである」と説明せられる dynamo は、まるで生ける者

の如く、しかもこの作品で大きな位置をしめてゐる。この dynamo 神の前に、狂つた主人公 Reuben は、女——母——生きた真黒な母なる神を見出し、狂的に宇宙を思辨する。現世における第二の母ともしたう Mrs. Fife に、その dynamo のうなりは「誰かが僕を眠つかせようと唄つてゐるようだ——僕が子供だつた頃、母さんがずつと前に僕がゐた所で、そこでは平和を得る事の出来た何処かずつと遠い所へ呼び戻してゐるようだ。」と告げているが、最後にはこの dynamo にあれて、まるで幼児のような声を出して死んでしまふ。偏狭な fundamentalist の父親への表面きつての Reuben の反撥は、自分と Ada の中を嫉妬し、自分の愛を裏切つた母への、怒りに発してゐる。Reuben は父の信仰をはなれた。併し隣家の無神論者 Fife の教えにも同化しきれない。古き神をはなれ、唯物的世界の中に放り出された Reuben の新らしい神の探求は、やがて母への思慕と、この世界を動かす動力の源としての dynamo との奇妙な合一を生み出し、それが、現実には、唯物論者の娘 Ada なる恋人を、凌辱と殺害によつて拒否し、やがて自らが母なる dynamo にひきずられて自殺をとけるのである。

Henry Adams はついでに Virgin Mary と Dynamo によつて、世界の統一と混乱の姿を象徴させようとしたが、O'Neill の Mariology はついでにはこの二つが合一して、かくも奇妙な神の像となつて、狂人 Reuben に拜跪される。(c) *Mourning Becomes Electra* (一九三二年作) によつては、南海の島のモチーフが「解放平和、安全、美、良心の自由、罪の汚れない事等——原始的なるものへの憧れ——母の象徴——生れぬ前からある闘争を持たぬ恐怖からの自由に対する憧れ」の象徴として用ゐられてゐる。わが母親の仇を Mannon 家に対して報しようとする Brant の出現によつて開始されるこの悲劇が、Mannon 家の父——母——子の陰惨な相剋を描いてゐる事は云うまでもなく。主要登場人物は皆この南海の島への憧れのとりことなつてしまつてゐる。

併し乍ら、次の二作におつては、この南海の島の如き imagery におつても、又それ以前の作におけるような、あら

わな Mother symbol の形にまじりても、母をとり扱う事は捨てられてしまつてしまつてゐる。Ah, Wilderness! (一九三三年作) Days Without End (一九三三年作) とがそれである。前者にまじり Mrs. Miller は O'Neill 好みの何の含蓄も持たぬ健全な主婦として描かれ、Miller の家庭は遂に破綻を見せなす。Richard はまともな maturity の完成を約束されてゐるものの如くである。又後者にまじりても、John Loving の信仰の喪失は catholic へ帰依する事によつて作品はめでたく結ばれてゐる。この若き John Loving の信仰の喪失が、熱心な主への祈りにも拘らず、父を、わけても次に母を、失つてしまつた事に發してゐるのは、さうな注目な價しなす。さてこの作品中で一番迫力のあるのは John の分身、仮面の男 Loving である。この作品以後、O'Neill は Days Without End にまじり John Loving の信仰恢復を又もや捨てて、desperate な懷疑の男 Loving の境位に立して創作を行つてゐる。人間の愛を確實なものとする永遠の希望と約束——神の愛によつて死は超克されると Father Baird は説いたが、Loving はこれに答えて「かう云つた。

「恐怖から生れた古い迷信ですね、死んでしまつたらもう何もありませんよ。それだけは少くとも確實です——その確實性に対して僕は感謝しなくてはなりません。たつた一つの生涯だけでもうんざりしますからね。もう一つの生涯に我々を引きわたすなど」と云う惨酷な事はよして下さい。最後には我々を平和に安ませて下さい。」

Jeppan Cometh (一九三九年作) にあける Hickey も Parritt も、この確實なるものに至るまでは心が落つかなし。前者には自分の一切の罪を許す妻の夢が許せなす。後者は「運動」に命をかける母の夢が憎らしい。形こそ異れ、この二人は、自分達の一番愛し、それ故に、その抱く夢に耐えられない、妻と母を殺し、一度びは「真理」を發掘したと思ふ心もが、その「真理」も彼等の生を支える何の力も持たない。彼等は共に自らの命を絶つ事によつてはじめて眞に確實に平和を得る。

Eugene O'Neill の作品にまじり "Mother"

この後に再び出現したのが、かの Josie なる Great Mother なのであつた。

(10) これまで、O'Neill のいくつかの作品にあらわれた「母」のとり扱いを見て来たが、母への想念、乃至は母の「愛」が現実を生を支える力となつて描かれたのは、わずかにすぎず、多くの作品では、いずれもそれは、この世の生を逃れて来る者をうけとる墓場として、この世の生をどけようとする者を阻む不吉な力として、自らが「うわべ」の生をしか生き得ない不幸な地霊として、或は生の否定に却つて生を悟る笑いによつて強制された假面として描かれた。それは決して現実の生を支える父—母—子の三位一体の確認ではなくて、「存在する、父」に対するはげしい憎しみと対置された、「母性」に対する法外な執着のうみ出したものである。それは単に個々の人間の、自らの失われた幼児期への思慕という心理的事実として語られてゐるのではない。これが至極重大な意味に拡大せられて、人生一般の解釈、文化批判の基礎に援用される事になる。自然が母を通して個人に分裂した事が、決定的な人間の不幸なのである。この不幸の解決を O'Neill は人間の maturity の実現の中には見ず、唯母への退行によつて行おうとしてゐるのではないか。こうした「母」を描く O'Neill であるが故に、その人物は多くは adolescent な段階に止るのであり、一般的にその性格は abnormal で morbid な反社会性によつて支配されるのである。

但し彼も又、時には catholic の教義を確認し、又時には「愛はとわに咲く花、命はとわにほとばしる泉」とも、「(人は)塵ながら、汝は永遠の変転、永遠の生成、神の胸の深みから混沌を通して飛翔する笑いの気高いしらべ」とも、「春は……光榮ある輝く命の冠を生む」とも唄いあひ、ともかくに生を肯定する態度もみせてゐる。この故に Quinn も「単に optimistic たるべく余りに鋭敏、単に pessimistic たるべく余りに広さ」悲劇作者、神秘家と O'Neill をみたのであらう。併し彼の肯定する生とは一体どのような生なのか。彼の描くものは、果して「背後の人生」なのか、それとも彼は単に具体的な人生を背後におしやつて、唯抽象のたわむれを行つてゐるにすぎないのか、その事は更

に他の登場人物をもみて、稿を改めて述べてみたいと思う。

Eric Bentley は (*New Republic* Aug. 4 1952) 哪噓の調子を以つてはあだが、*A Moon for the Misbegotten* に於ける「純情の酒乱の蕩児を胸に抱く巨大な処女は、皆人の心内に O'Neill の記念碑として立つてあろう」と云つてゐる。古代より様々に語られた生の基盤として觀られたこの「母」の系列の中で、O'Neill のそれを置く事によつて、吾々は彼をより正しく位置せざる一つの便宜を得た事にならう。最後に、この O'Neill をみる場合、特に興味ある対照をなすと思われる二人の言葉を引用してこの稿を結びたい。

「生命にだけは終りが無い。その百万の星の家の、多くは空虚で、多くは未だ建つていないけれども、又その広大な領土は未だたえがたいほどの荒地ではあるけれども、私の種子はいつかそれをみだし、はつのはてまでその物質を支配するのであろう。そしてその向うにはどんなものがあろうか、は、リリスの目は弱すきつ判りなげ。併し、向うにあるとらう事だけで充分である」
又、

“Make a Picture of America as an *Immortal Mother* surrounded by all her children young and old—no one rejected—all fully accepted—no one preferred to another. Make her seated—she is beautiful beyond the beauty of virginity—*she has the inimitable beauty of the mother of many children*—she is neither youthful nor aged—around her are none of the emblems of the classic goddesses—nor any feudal emblems—she is serene and strong as the heavens.

Make her picture, painters! And you her statue, sculptors! Try age after age, till you achieve it! For as to many sons and daughters the perfect mother is the one where all meet, and binds them all together as long as she lives, so the mother of These States binds them all together as long as she lives.”

前者は O'Neill の海をくぐつて現れたキリン演劇のりきと G. B. Shaw の *Back to Methuselah* の幕切れとを
Eugene O'Neill の海をくぐつて現れたキリン演劇のりきと “Mother.”

Eugene O'Neill の作られた “Mother”

わる Lith の作られた。後者は O'Neill が先づアメリカ文学の開花をもたらした Walt Whitman のそれ（一八五〇）の後“Thou Mother with thy Equal Brood”の母胎となつたものである。Oscar Cargill がその ideodynamics の研究 (*Intellectual America, Ideas on the March*) 中 O'Neill や Sherwood Anderson を継承する Preadians の章の終りに、この Whitman をおぼえて出て来つゝる事は仲々に興味がある。